

文部科学大臣賞(大規模校の部)

広島県東広島市立高美が丘中学校

「本気で考え」結実

東広島市立高美が丘中学校(森田哲校長、203人)は2021年4月、開校30周年を迎える。その直前に、初の毎日カップ「中学校体力づくり」コンテスト文部科学大臣賞受賞という朗報が舞い込んだ。校訓は「本気で考え 行い 省み そして 感謝」。そして「知・徳・体の調和がとれ、思いやりと行動力のある生徒の育成」という教育目標が結実した。

同校2年目の米澤正晋教諭(28)は新型コロナウイルスによる休校期間中、「体力づくり日誌」への記入を生徒たちに課し、1週間ごとにその内容をフィードバックして、生活習慣の見直しにもつなげさせた。「食事、睡眠、入浴で家庭との連携は重要」と強調する。

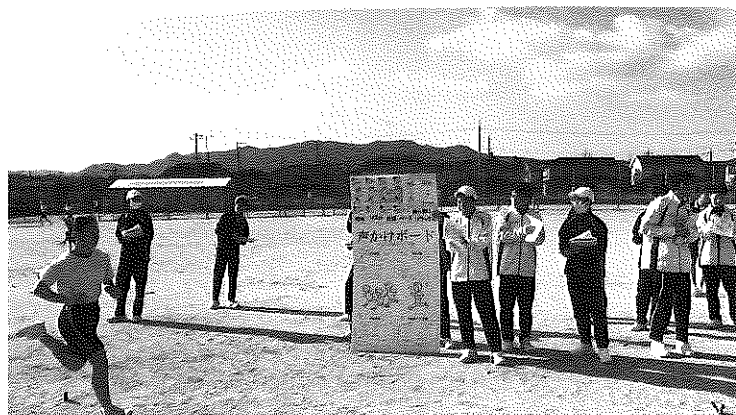
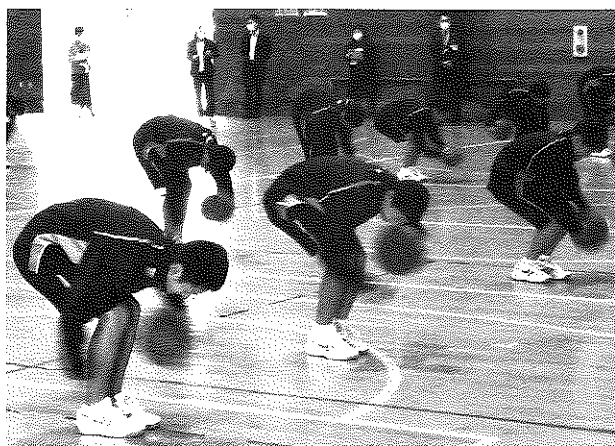
市教委のガイドラインに従い、授業前後の手指の消毒や用具の消毒に腐心した。バスケットボールの試合も5人対5人ではなく「3 on 3」にして「密」を避ける一方、空間を広く使うことを教えた。

ラミネート加工したバスケットボールコート上の図面をホワイトボード代わりに使って、生徒同士で見せ合い、試合の作戦を考えるなどコミュニケーションを重視した。コロナの感染拡大防止のための工夫だったが、米澤教諭は「その競技が得意な中心人物だけがしゃべるのではなく、全員が自分の意見を持てる」とその効用を語る。

体育大会は例年通り9月に開催できた。「やれる範囲でやってみなさい」と森田校長が背中を押した。1クラスに一つずつ立てていたテントを今年は倍にして、熱中症対策と「3密」防止を両立させた。綱引きは前後1メートルずつ空けて生徒が並ぶようにし、「ソーシャルディスタンス綱引き」と名付けた。

コロナ下ならではの競技は5人1チームの「ドリームキャッチ」。1辺が2メートルのブルーシートの四隅を4人が持ってピンと張り、その上にゴム素材のラグビーボールを置く。4人が息を合わせてブルーシートを上下させ、もう1人が持った高さ4メートルの竹の先に付けたカゴにボールを入れるもので、大いに盛り上がった。

1人1台ずつ与えられたタブレット端末で手本の動画を見たりして生徒が実演し、生徒同士で実技を撮影し合って結果を確認するなどICT(情報通信技術)を活用した授業の進め方も高く評価された。



毎日新聞社賞

広島県東広島市立高美が丘中学校

ICTは、あくまで手段

今年4月に開校30周年を迎えた東広島市立高美が丘中学校(森田哲校長、213人)が、前年度の文部科学大臣賞に続き、毎日新聞社賞を受賞した。生徒の自己肯定感を高める体育授業の工夫など、常に前向きな取り組みが高く評価された。

校訓は「本気で考え 行い 省み そして 感謝」。そして「知・徳・体の調和がとれ、思いやりと行動力のある生徒の育成」。11月の毎日カップのオンライン審査では、生徒会長の大濱拓人さん(3年)と副会長の戸毛真美さん(同)が、学校を紹介。「これからも校訓にあるように、感謝を忘れずに何事にも取り組みたい」と決意を語った。

米澤正晋教諭(28)は同校3年目。「生徒たちは当初、学習カードに授業の感想を『難しかった』『できなかった』としか書けなかった。最近は技術のポイントを書けるようになった」と話す。体力づくり日誌を書かせることを通じて、朝食を摂る生徒は100%になった。

コロナ下の今年度は、体づくり運動アプリを導入した。「持久力を高めたかったら、瞬発力なら、それぞれこういう運動があるよと、紹介もしてくれる。結果を生徒と先生が共有でき、苦手な子にやる気を与えられる」と、その効用を語る。一方で、「ICT(情報通信技術)が目的にならないように、あくまで手段。自分の姿を映像で見せることが目的にかなう時に使っている」と強調する。

体育大会は9月に、平日開催とすることで実現できた。昨年よりも待機場所のテント数を増やして、熱中症対策と「3密」防止を両立させた。どの競技も軍手を着用して参加し、自分の水筒とタオルはバッグ内で管理。そのバッグを必ず自分の右に置く決めて、ソーシャルディスタンスを確保した。

バレーボールの授業では、ペアを組んだ生徒が投げたボールをレシーバーが両手に持ったバケツでキャッチする練習をしている。レシーブの際に膝を曲げて腰を落とし、手首に当てる感覚をつかむためだ。長い棒にひもをつけてボールをくくりつけ、空中を動かしながら時々止め、アタックに跳ぶタイミングやサーブレシーブとその後のフォーメーションを繰り返し練習する。

また前年度から、縄跳びトレーニングに取り組んでいる。曲に合わせてリズムよく跳び、楽しく持久力強化につなげている。

